

騎馬鷹狩文化の起源を求めて —アルタイ山脈に暮らすカザフ遊牧民とイーグルハンターの 民族誌—

相馬拓也

早稲田大学 高等研究所 助教

I. 騎馬鷹狩文化を支える遊牧世界

人類が猛禽類を手なずけるようになった起源のひとつは、考古学資料をひも解くとおよそ3000年前の中央ユーラシア山岳地域と推測されます。当初19世紀の終わり頃まで、鷹狩の技術はその最古の技法が古代エジプト第18王朝に起源すると漠然と考えられていました。太陽神ホルスとみなされたハヤブサをはじめ、トト神の聖鳥クロトキ、不死鳥と考えられたアオサギなど、鳥類に対する聖性が広く育まれたことから、鷹狩技術の発生も古代エジプトに由来すると推定されていました。この「鷹狩＝エジプト起源説」とは別に Epstein [1943: 497-509] は、アッシリアのサルゴン2世時代（前7世紀頃）の鷹狩技術の存在に言及しました。かつてドイツの民族農耕学者 E. ヴェルトも、犁農耕による大型草食獣の家畜化と大型の猛禽類の家畜化（馴化）に文化的連続性を見出し、「鷹狩（タカ、ハヤブサ、イヌワシ）」と「犁農耕文化圏（ウシ、スイギュウ、ウマ、ロバ）」が重なり合うと論じました [ヴェルト 1968: 120-122]。近年は鷹狩起源の観念的な探究を脱し、Candy [2002: 161-201] がヒッタイト時代の西アジア各地に出土した鷹狩図像を時系列的に研究し、キュル・テベ Kul-tepe で発見された紀元前19世紀頃と考えられる鷹匠の図像から、鷹狩の起源を紀元前2000年頃の中東アナトリアと推定しています。また著者もアルタイ山脈北部のツァーガンサラー岩画の猛禽図像や、新疆ウイグル自治区クランザリク古代墓地での猛禽埋葬の事例から、鷹狩文化の起源は紀元前1000年頃の中央ユーラシアと推測しています。とくに騎馬で鷹狩を行う「騎馬鷹狩文化 horse-riding falconry」は、中国シチャゴウ遺跡から出土した鷹匠人物をあしらっ

た青銅製品により、紀元前3世紀頃その初出が特定されます [Soma 2012a]。

こうした鷹狩文化が生活技法のひとつとして現在も根を下ろしている社会は、モンゴル西部バヤン・ウルギー県（Баян-Өлгий Аймаг / Bayan-Ölgii Province）（図1）に居住するカザフ系モンゴル人（以下、アルタイ系カザフ人）のみと考えられます。ここでは西欧や日本で一般的なオオタカやセーカーハヤブサを用いず、世界最大級の猛禽類イヌワシ（*Aquila qurisaetos daphanea*）のみを手なずけ、騎馬によって出猟する「騎馬鷹狩」を行います（図2a-f） [Soma 2012b-c, 2013b, 2014, 2015a; 相馬 2012a-b, 2013a-b, 2014a-b, 2015a-b, 相馬 2016a-c]。その勇壮な姿はNHK制作のドキュメンタリー映像作品にも描かれています [日本放送協会（NHK）2003, 2010, 2015]。そして、カザフ男児たちの「イヌワシの馴致」「騎馬による出猟」「右手での据え置き」などの特徴は、古代の鷹狩ルーツやオリジンとの直接の系譜を示唆するもの

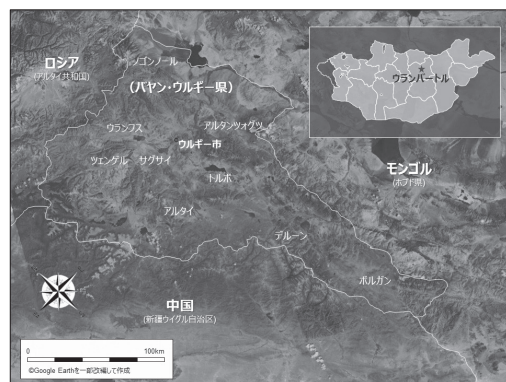


図1 バヤン・ウルギー県と調査地の位置



a アルタイでもっとも熟練の最古老のひとり



b サグサイで生活を共にした若き鷲使い



c メディアでも紹介された少女の鷲使い



d 騎乗での訓練風景



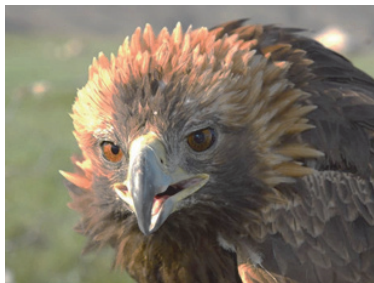
e 狩りの一場面



f キツネを捕えた鷲使い



g イヌワシ *Aquila chrysaetos*



h 狩猟用のイヌワシ



i キツネ捕獲の訓練風景



j 羽根を広げると2mを超える



k 出猟前の訓練風景



l ヒツジの頭をむさぼるイヌワシ

図2 アルタイ系カザフ人の鷲使いとイヌワシ

と考えられます [Soma 2012a, 2013a; 相馬 2012a, 2013a]。こうした勇猛なカザフの鷹匠（以下、鷲使いもしくはイーグルハンター）と騎馬鷹狩の伝統は、カザフの民族象徴を牽引する固有文化として根付くようになりました。ウルギー市内には、イヌワシと鷲使いの姿は、バヤン・ウルギー県章をはじめ、地酒のラベル、公園のモニュメント、鉄扉装飾、その他数多くの宣伝広告にもあしらわれ、「カザフらしさ」のモチーフとして大衆化されています。

しかし、多くの無形文化遺産や伝統文化の近代化にともなう文化変容が示すように、カザフ騎馬鷹狩文化の伝統も「生活習慣の変化」「出猟実践の停滞」「いにしへの環境共生観の喪失」など、古来の文脈を失いつつあります、そしてその「脱文脈化」は、社会インフラや人々の対外接触の覚悟がないまま開かれた急激な観光化の進展とともに、さらに著しさを増しています [相馬 2013a, 2013b; Soma and Battulga 2014]。現地では「イヌワシを腕に据えて盛装したカザフ男児が馬を駆る…」という、いわば寓話化／偶像化された表現形式が独り歩きする一方で、伝統的な飼養術の喪失

が進み、無責任なイヌワシ飼養による死亡事故や逃避が増加しています。また出猟経験をもたない鷲使いも多数います。観光客へのデモンストレーションにより、イヌワシを腕に据えるだけで伝統継承者として確固とした社会的地位が獲得されてしまう風潮が確立され、実際には飼養や狩猟実践を行わない“デモンストレーター”がその大多数を占めるようになっていきます。カザフ民族を象徴するいにしへの環境共生観と自然の保全生態観は形骸化し、本来の生活技法の文脈からは急速に単離されているという印象は否めません。

鷹狩とは人間の営みだけで継承保存できる「無形文化遺産」ではありません。鷹狩は本来、古代の遊牧民が生活のなかで編み出した技法であり、家畜を育て、季節移動を行い、騎馬での出猟が途絶えなかった季節移動型牧畜活動（以下、遊牧）の暮らしと生産活動に依存することで、必要不可欠な成立条件が満たされてきたと言えます [相馬 2015a]。本稿ではカザフ鷲使いのイヌワシ飼養術と出猟実践の実態を、遊牧民としての生活文化とも合わせて描きだし、その特異なイヌワシ飼養文化の存続について一考を述べたいと思います。

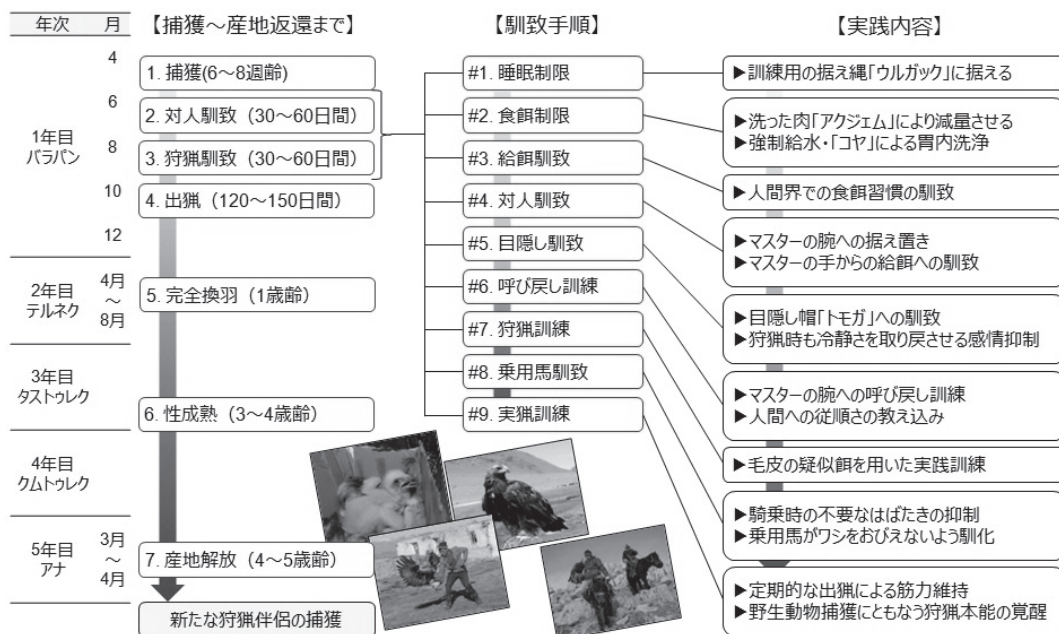


図3 イヌワシの基本的な馴致プロセス

※本稿では以下、アルタイ系カザフ人の鷹匠を「鷲使い」もしくは「イーグルハンター」と区別し、かれらの鷹狩を「騎馬鷹狩文化」、その実獣を「騎馬鷹狩獣」と呼び、通常の鷹狩文化との差異化を示しました。

Ⅱ. 主要調査地サグサイ村

調査地バヤン・ウルギー県には11の村があり、その全域に推定約70名のイーグルハンターがいます。彼らの多くは遊牧民であり、自動車でしかアクセスできない遠隔の冬牧場に居住しています。そのため、最初の調査地はウルギー市からも定期タクシー便が運行し、観光客の往来も比較的多いサグサイ村で調査の足がかりを探しました。サグサイ村とその隣接冬牧場には、およそ19名(17世帯)のイヌワシ保持者が居住しています。定住生活をしながらイヌワシを保持する鷲使いは、ほとんどがこのサグサイ村に居住しています。サグサイ村では2002年から、県の旅行会社「Blue Wolf社」によってローカルな鷹狩文化の祭典「イヌワシ祭 (Golden Eagle Festival)」が開催されるようになり、村で唯一外部からの観光客が訪れる大きなイベントに成長しています。こうした鷹狩・鷹匠の文化を通じた大きなイベントはウルギー市とサグサイ村の2カ所のみで行われるようになり、他村からも多数のイーグルハンターが参加しています。そのためサグサイ村では、カザフ騎馬鷹狩文化の伝統と近代化への応答の双方の重層関係が観察できる場所でもあります。さらに10代から80代まで全世代にまたがるイーグルハンターが居住していることから、まさにカザフ騎馬鷹狩文化の古典的文脈と現代の応答の様子が見られるため、フィールドとして適していると考えられます。

しかし参与観察と集中的な情報提供をもらえるインフォーマントを捜し出すのは、フィールドワークでもっとも困難な仕事のひとつと言えます。長期滞在を開始した2011年7月からの最初の1ヵ月間は、毎日イーグルハンターの家を訪れては、たどたどしい現地カザフ語で話を聞き、嫌な顔をされ、金品を要求されながらも村を歩き回っていました。そこで奇遇にも、隣接していた夏牧場で生活を営むひとつの鷹匠家庭と知り合いになりました。まだ若い18歳の青年がイーグル

表1 年齢別(時期別)名称の比較

数え年	満年齢	筆者 ¹⁾	ビフマル氏 ²⁾
1年目	0歳齢	バラバン	バラバン
2年目	1歳齢	テルネック	カン・トゥプト
3年目	2歳齢	タス・トゥレク	テルネック
4年目	3歳齢	クム・トゥレク	アナ／タス・トゥプト
5年目	4歳齢	アナ	ムズバラク
6年目	5歳齢	カナ	コク・トゥプト
7年目	6歳齢	サナ	カナ
8年目	7歳齢	ユー・トゥレク	ジャナ
9年目	8歳齢	スー・トゥレク	マイ・トゥプト
10年目	9歳齢	アールチン	バルクン
11年目	10歳齢	パールチン	パールチン
12年目	11歳齢	(以後同じ)	チェギル

¹⁾ サグサイ村ダイン地方での古老からの聞き取り [2011年8月現在]

²⁾ 地元カザフ人の地域研究者による聞き取り

ハンターの修練を積んでいる姿に魅了され、その家族J氏宅に日々通うようになりました。この家族は40代後半の夫婦と、で男子5人(25歳、23歳、18歳、14歳、6歳)、女子1人(20歳)の8人家族で、カザフには一般的規模の家族でした。それまでの地域の人々のけんもほろろの対応とは裏腹に、家族は寝食をともにすることを向こうから提案してくれました。

本調査で示した結果の多くは、J氏家族との400日間以上におよぶ生活のなかで得られました。

Ⅲ. イヌワシ馴化の知と技法

アルタイ系カザフの鷲使いは、メスのイヌワシのみを鷹狩用に馴化します。メスのイヌワシは“ブルクット бұркіт”と呼ばれます。ただしオスのイヌワシは“ブルクット”とは呼ばれず、蔑みの意味を込めて「ヒヨッコ」を表す“サルチャсарша”と呼ばれています。カザフの鷲使いの間では、ワシの種類、性格、年齢、体格によって、馴化の仕方には個別の知と技法が育まれてきました。カザフの古い諺では“10羽のワシには10とおりの異なる飛び方がある(10 бұркіт туралы 10 ұшады)”と、それぞれイヌワシに備わった多様な個性が表現されています。鷲使いによる「イヌワシの馴化／ラポール構築」は“ウズゲ・ユレトウ өзге уйрету”とされ、おおきく分けて(1)巣から捕えたヒナワシ(巣鷹)“コルバラ қолбала”の馴化と、(2)罠などで捕えた成鳥“ジュズ жүз”の



a 狩猟ポイントから獲物を探す鷲使いたち（2011年12月撮影）



b 狩場の山岳地を慎重に騎行する鷲使いたち（2011年12月撮影）

図4 騎馬鷹狩の出猟風景

馴化、の2種類の方法があります。一般的にジュズの馴化には約45日間、腕の良いイーグルハンターなら約30日間で馴らせるといわれています。捕獲した個体の個性や体尺に適った「適正量のエサを与えること」「バブ・ケルセ бабы келсе」が、なによりも重要とされ、鷲使いの能力の本質と言って過言ではありません。

カザフ鷲使いのあいだでは、イヌワシには換羽回数に応じた「年齢別名称／年齢」が与えられています。この年齢は11年目（満10歳齢）まで個別に呼び分けられ、その後は数字を冠して“パールチン”と呼ばれます（表1）[相馬2016b: 353]。イーグルハンターたちは、みずからのイヌワシに特定の「名付け given name」をすることはなく、共通して年齢別名称でイヌワシを区別しています。これは年齢により、飼養や訓練の方法が異なるため、異なる接し方を暗示したコードのような役割を果たしてきたと考えられます。

幼鳥を飼育するときは、鷲使いはまだ飛び立てない1～3月齢のヒナワシ“バラパン”を巣から捕らえて狩猟用に飼養します。またアミやワナを用いて、飛び立てるようになったばかりの若鳥“アク・バラパン”の捕獲も行われます。バラパンの捕獲時期は6月中旬がもっとも多く、これに先立ってブルクツチュは山々を騎行し、あらかじめイヌワシの営巣地点を探し出しておきます。一般的にイヌワシは、孵化から10週間で自ら飛翔・捕食することが可能となり、12週目を過ぎると巣立ちを迎えるといわれています。地元ブルクツ

チュの伝承では、毎年7月20日前後に幼鳥は巣立ちを迎えるといわれています。そのため、巣立ち前で体も成鳥並みに成長したバラパンの馴致が好まれているのです。そしてカザフ鷲使いは古来のならわしとして、4～5歳ワシになった冬の終わりに山へと放ち、4～5年間を連れ添った「相棒」に別れを告げます。一般にイヌワシは4～5歳で繁殖能力を身に付けます。この年齢は、ワシがもっとも強壯になる時期（4～6歳ワシ）と一致します。強壯な盛りの時期にイヌワシを山に返すのは、つがいとなって新たな世代を育ててほしいという、鷲使いのつちかった環境共生観にもとづいているためです。そのため、別れを告げる5歳ワシには“アナ（＝母親）”という名称が与えられています。イヌワシを捕獲・馴致することで、野生の個体数に影響を及ぼさないための、鷲使いによる古来の掟と考えられます。これはカザフ騎馬鷹狩文化の育んだイヌワシとの環境共生観をよく表す行為といえます。

イヌワシ馴致の具体的な手順は図3に示した#1～#9のプロセスにしたがって進められます。西欧や日本の鷹狩とくらべるとやや荒っぽい印象も受けますが、系統立った訓練の手法が用いられます。鷲使いたちはみな、「イヌワシを馴化するのは、人間の子どもの育てるのと同じ」と考えています。イヌワシの馴化には、行動規制や食餌制限などの厳しい施しもしなければなりません。しかし、両者の間には主従関係よりも、「友」としてのラポール構築が行われるべきとの古い教訓が

根づいています。

IV. 騎馬鷹狩猟の実践と技法

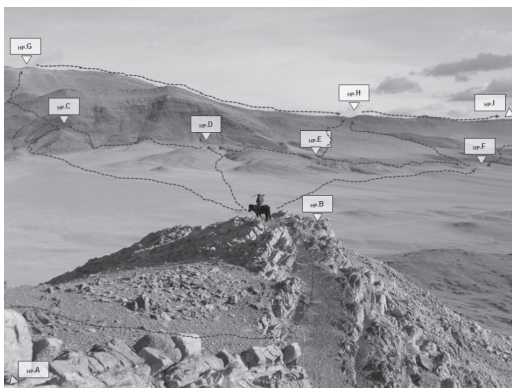
アルタイ山脈では9月を迎えると、第1週目から急激に気温が低下します。この時期からイーグルハンターたちは一斉にワシの訓練を開始します。訓練が始まると、ワシには水に浸して血抜きした肉“アク・ジェム”が与えられます。鮮血を食べさせず、空腹感を増幅させて狩猟へと駆り立てるためです。

サグサイ村ではホブド河北岸のアグジャル山地が、伝統的に狩場として利用されてきました〔相馬 2013a; Soma 2014〕。狩猟は山岳地をむやみやたらと獲物を求めて徘徊するのではなく、小高い丘や稜線などの見晴らしの良い狩猟ポイントから眺望し、静止して獲物を探し出します（図 4a-b）。狩猟には必ず勢子が同行し、麓付近でおおきな音や声をあげて岩陰の獲物をはたき出します。騎馬鷹狩猟はキツネの生息数が少ない草原や平原で行われることはほとんどなく、岩山の騎馬登山が騎行主要路とされます（図 5a-b）。同狩場では、獲物を探索するための狩猟ポイントが9地点確認されました（ $HP-A \sim HP-I$ ）。自宅から $HP-A \Rightarrow HP-G$ （もしくは $HP-H$ ）の狩猟ルートは、走行距離で約 6.4 ～ 7.8km となり、片道平均 4 ～ 5 時間前後が費やされます。普段使用される「標準ルート」（ $HP-A \Rightarrow HP-I$ 間往復）の最大走行距離は約 20km 以上となります。滞在先の鷹匠 J 氏宅からもっとも遠い $HP-I$ は、走行距離で 5.7km（直線距離 4.5

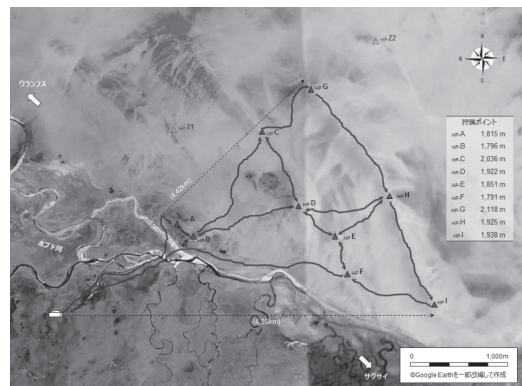
km）程度に位置しています。狩場でのキツネとの遭遇率は低く、頻繁な探索騎行が成果を左右するため欠かせません。イヌワシを腕に据えてのこうした長距離登山は難しく、身体的負荷を考えると騎馬なしで出猟が成立することはないと思われます。

つまりアルタイ山脈のカザフ人コミュニティでは、牧畜社会にともなって騎馬習慣が絶えなかったことも、騎馬鷹狩文化を存続させたおおきな成因にもなっています。例えばキルギス共和国（イシク・クル湖周辺）の騎馬鷹狩猟が衰退した背景には、伝統的な牧畜活動の変容とともに、乗用馬所有率の急激な低下がその一因にあります〔相馬 2008〕。牧畜コミュニティでは乗用馬／狩猟馬の維持が比較的容易であり、都市部・定住地で維持するための干草、濃厚飼料の供給が最小限で済みます。高コストな乗用馬の所有・維持管理への負担が少ないことに加え、日常生活に騎馬習慣が継続されたことが、アルタイ地域で騎馬鷹狩猟が生活技法としての役割を失わなかった理由と考えられます。

出猟は例年、3月20日前後のイスラーム新年「ナウルズ祭」をもって終わりを告げます。春を迎えると気温の上昇による換毛と出産により、キツネの毛皮の質が低下します。そしてナウルズの到来は、遊牧民にとって牧畜活動の再開を意味します。家畜の出産、交配管理、搾乳、毛刈り、夏営地への移動など、牧畜の「本業」に専念する時期を迎えます。この「猟閑期」ともいえる時期に



a アグジャル山地全景



b 狩猟ルート

図5 狩場アグジャル山地

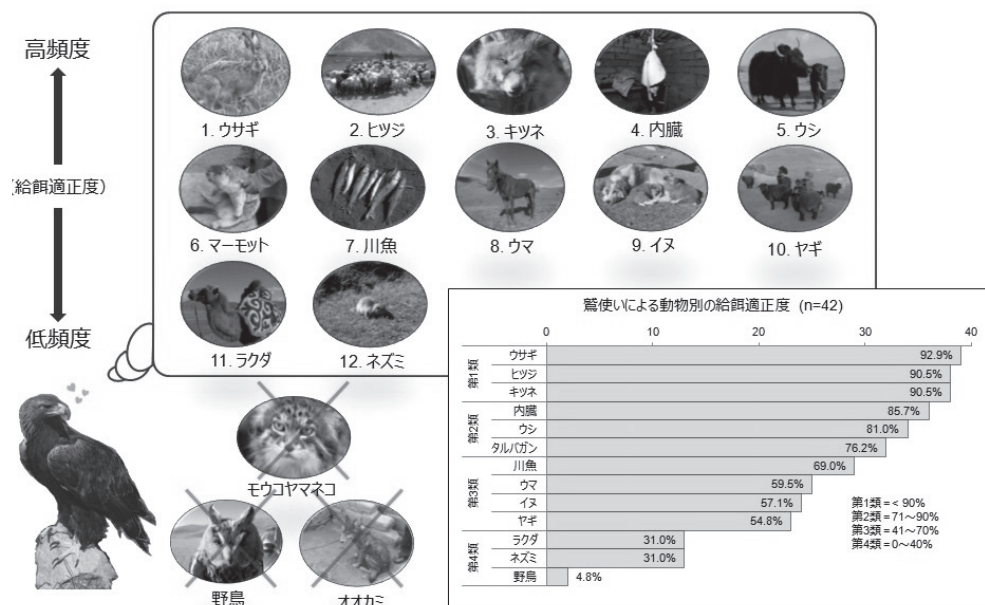


図6 イヌワシへの給餌適正動物

はイヌワシも換羽が始まるため、飛翔が安定しなくなり、激しい狩猟活動に使用することが控えられるのです。

騎馬鷹狩は冬季にキツネなどの毛皮の需要機会を遊牧民に与え、牧畜活動は毎年の家畜再生産により、イヌワシへの食餌供給と乗用馬保持を支えています。いわば騎馬鷹狩と牧畜は季節〔夏季／牧繁期⇔冬季／猟繁期〕をたがえて互恵する生業複合の関係にあるといえるのです。

V. イヌワシへの餌やりと牧畜活動の互恵性

1. イヌワシの給餌適正と消費量

イヌワシには生来の食餌嗜好許容範囲 (diet palatability) の広さがあり、さまざまな肉の種類に許容性を示します。同じ鳥類のマガモ、ツル、オオバン、オオタカの捕食に加え、北米ではコヨーテ [Mason 2000]、トナカイでも捕食されることがあります。またブルガリアのサマラ周辺では甲羅干しするリクガメ (*T. hermanni* / *T. graeca*, *Testudo* sp.) が55.4%とハリネズミ (*Erinaceus roumanicus*) が13.8%と、全採餌の大部分を占めることもあります [Georgiev 2009]。さらに同地域では、町でのんびりと暮らすイエネコ (*Felis*

silvestris catus) も不幸なことに捕獲対象となります。都市型のエコシステムをイヌワシが賢く利用している一例と言えるでしょう。ただしカザフのイーグルハンターにもっとも好まれる獣肉は、狩猟により得た野生動物の肉、カザフ語では“アン”の肉とされています。構成的インタビューにより得た結果から、給餌に好ましい動物別適正度は第1類～第4類に分類されました (第1類: < 90% / 第2類: 70 ~ 90% / 第3類: 40 ~ 70% / 第4類: 40% <) (図6)。もっとも給餌に適している野生動物はウサギ、キツネ、シベリアン・マーモット (タルバガン) があげられています [相馬 2015b]。

イヌワシを飼育するうえでの最大の困難は、給餌用の食肉確保と言えます。生活をともにした若きイーグルハンター J 氏の給餌頻度と分量 (1回の給餌量 300 ~ 500g) の観察結果から、年間食肉給餌量はおよそ 136.kg ~ 181.5kg と見積もられました [Soma 2015a] (図 7a-b)。これを季節別の平均値でみると、夏期 144.5 ± 15.2 (kg)、冬期 111.5 ± 13.5 (kg) となり、冬季は夏期にくらべて、給餌分量を 22.9%ほど減らしていることがわかります。他方、鷹使いのインタビューから得られた

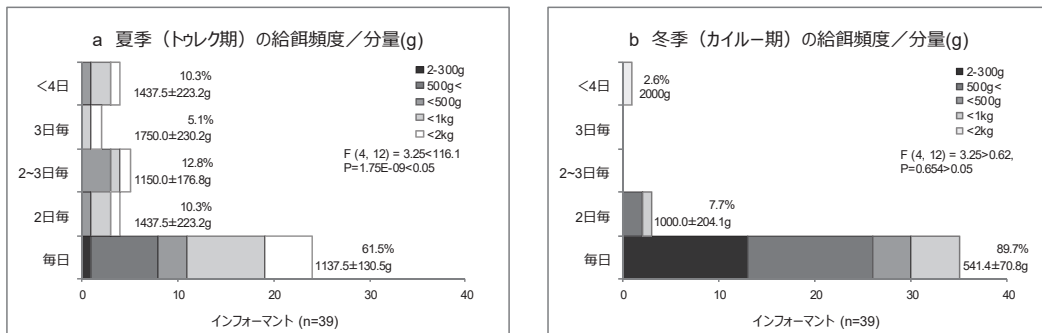


図7 イヌワシへの給餌頻度／分量

結果を平均すると、1年間でイヌワシ1羽に与えられる食肉総重量 (Mean ± S.E.) は平均 241.3 ± 18.3 (kg) となります。この食肉重量は、現地の在来ヒツジ換算 (1頭の枝肉 20～25kg) で9.6～12.0頭分に相当します。鷲使い家族は毎年大量の食肉をイヌワシのために確保する必要があります。しかし「イヌワシに家畜の肉を与えすぎると飛ばなくなる」と考えられており、実際に野性を失うことで狩りへのモチベーションが著しく低下することがあります。そのため家畜と野生動物の肉を体調に合わせて定期的に与えることが、イヌワシの捕食能力を低下させないために欠かせない条件となります。

2. 家畜再生産と食肉確保

イヌワシへ与える大量の食肉を確保するためには、牧畜活動によって安定した幼畜の出生再生産が不可欠となります。イヌワシ1羽を健全に保持し、かつ平均的な社会生活を営むための家畜所有数 (total livestock possession: TLP) を、以下のように算出しました [Soma, Buerkert, and Schlecht 2014]。

調査対象コミュニティの牧畜世帯 (H_{Hh}) は、TLPに応じておおきく次の3つに分類することができます (Lh>201頭 / Mh=101～200頭 / Sh<100頭)。階層世帯ごとの平均出生数 (実数) は Lh: 78.3頭 / Mh: 47.5頭 / Sh: 15.2頭となります。つまり、調査地の牧畜コミュニティでは家畜所有数 (成畜) 100～150頭に対し、約40～45頭の幼畜出生数が見込まれると考えられます。牧畜生活者は一般的に、毎月2頭程度のヒツジ・ヤギの消費が望ましいとされています。平均的な牧

畜家庭1世帯の年間食肉消費量は、Lh: 21.7頭、Mh: 18.0頭、Sh: 13.0頭となり、平均すると15.6頭/年間と算出されました。この結果からすると、イヌワシ1羽は平均的な牧畜家庭 (Mh) の約半年分以上の食肉を消費しています。これは低所得世帯 (Sh) の年間消費分と同程度の食肉分量となります。牧畜家庭1世帯の理想とする年間食肉消費量24.0頭に、イヌワシの消費数9.6～12.0頭分を加えると、鷲使い世帯は33.0～36.0頭前後の消費が理想値と思われます。この消費数に見合う幼畜の再生産には、少なくともヒツジ・ヤギ (成畜) 約200頭以上 / H_{Hh} の所有が必要と算出されます。これは単純計算で、幼畜再生産の半数を人間とイヌワシの消費分に回し、半数を増産へと回せる規模となります。

このように、牧畜社会以外でイヌワシを保持するには、食肉の確保がきわめておおきな経済的負担になることは間違いありません。J氏世帯の生活水準はサグサイ村でも最下層でした。そのため、夏にはホブド河で釣ったマスやウグイなどの川魚を週に2～3回与えていました。また冬季にはときおりいきだおれた野犬を引取り、イヌワシに与えることもありました。イーグルハンターたちにとって冬季の出猟とは、「獣肉の確保」としての意味もあるのです。「イヌワシを駆る」ことは、いわば「イヌワシによって狩らされている」という皮肉な逆説を現代の騎馬鷹狩文化ははらんでいると言えます。騎馬鷹狩文化の成立には、家畜を飼養する遊牧社会での安定した牧畜生産性が、不可欠な成立要件なのです。



a イヌワシ祭で盛装した鷲使い（2013年10月撮影）



b イヌワシ祭の開幕式（2013年10月撮影）

図8 イヌワシ祭の開催風景

Ⅵ. イヌワシ祭と騎馬鷹狩文化の変容

カザフ騎馬鷹狩文化は現在、急激な近代化により変容にさらされ続けていると言えます。ポスト社会主義体制のはじまる1990年代、カザフ人コミュニティでは社会的混乱期のなかでイスラーム信仰やイスラーム暦新年「ナウルーズ」など、独自のカザフ・イスラーム文化に根ざした宗教色の色濃い伝統が復権するようになりました。こうした自文化・自民族復興に目覚めた社会的うねりを受けて、2000年10月から「イヌワシ祭り Golden Eagle Festival」が開催されるようになりました（図8a-b）。この祭りは例年10月に開催されます。毎年50名を超えるイーグルハンターたち各地から集結し、イヌワシを操る腕前などを競い合います。見応えのある鷲使いの盛装姿や鷹匠装束の迫力に加え、伝統的な馬技競技なども多数実施されることから、現在では例年300名を超える外国人旅行者を集客するまでに成長しています。例年の盛況ぶりにくわえて、カザフ騎馬鷹狩文化の「UNESCO世界無形文化遺産」への登録（2010年11月）は、エスニック・マイノリティの文化振興における一つの成功事例といってよいのかもしれません。

ただし、この祭典は現地の伝統意識やアイデンティティの確立を飛躍的に前進させた反面、近代化体験による著しい「脱文脈化」の変容をもたらした側面が否めません。イヌワシ祭や急激な観光化によって鷲使いの伝統知や出猟実践は廃れ、いわば観光客向けデモンストレーションにその目的が特化しつつあります。現在は70名ほどの鷲使

いがいますが、定期的に出猟するハンターは20名に満たなくなっています。現在はハンティング目的以外で、地域によって独自の文化継承の動機づけも見られます。サグサイ村ではイヌワシ祭の参加や観光客へのデモンストレーションを目的に、アルタイ村では祭りへの参加と高名な鷹匠家系による継承によって、そしてトルボ村では出猟への参加が、文化継承の理由となっています。とくにサグサイ村とアルタイ村にとって、イヌワシ祭への参加が存続におおきな影響力を持つようになりました。騎馬鷹狩文化の継承のモチベーションも多様化しているといえます。

こうした急激な観光化は、地域の人々や遊牧民にとっても、イヌワシに対する気持ちに正負両方の影響をもたらしています。一例に、祭りへの参加や自宅での鷹狩デモンストレーションによる観光客誘致をもくろみ、イヌワシ（ヒナと成鳥）の金銭的取引が近年、鷲使いやマルチンの間で常態化するようになっていきます。こうした傾向は近い将来、イヌワシの繁殖や個体数に悪影響をおよぼしかねないといえます。いわばアルタイ系カザフ人の騎馬鷹狩文化は、観光化と近代的変容による存続と引き換えに、その伝統と文脈が解体されつつあると言えるでしょう。

VII. カザフ鷲使い⇔イヌワシ共栄仮説」：ヒト／猛禽間のマルチスピーシーズな関係性

数多くの問題や課題がくすぶる現代のカザフ騎馬鷹狩文化ですが、カザフ鷲使いたちはイヌワシを人間界で馴化することにより両者の共栄する生存圏を創り上げてきたと考えられます。カザフ鷲使いたちの「産地返還の掟」により、選ばれたイヌワシは4～5年間をマスターと生活を共にします。もっとも強壮な年齢となったワシを山へ返すのは「自然界でつがいとなって次世代を育て、ふたたび強いワシにめぐり合わせてくれるように・・・」という、カザフ鷲使いたちの祈りが込められていると言えます。こうしたアルタイの環境に順応したイーグルハンターとイヌワシとの「出会いと別れの物語」は、馴致プロセスとラポール構築をへたイヌワシ個体の能力開発を促し、両者の共存／共栄関係が相互互恵的に維持されたと仮定されます。今後の調査研究により生態学的な裏付けを明らかにすべき課題が残りますが、これを「カザフ鷲使い⇔イヌワシ共栄仮説

(hypothesis)」として以下HY₁～HY₅相互作用の結果として解説してみます。

[HY₁] 営巣範囲の拡大：サグサイ村周辺でイヌワシを捕獲することは決して難しくなく、イヌワシ個体数の豊富さは騎馬鷹狩への人々の参入を促し、現代に存続させたひとつの理由でもあります。鷲使いは巣からヒナ（通常は2羽）を直接捕獲することで、猛禽類特有の「兄弟殺し（cainism/siblicide）」の現象からの生存率が向上すると推測されます。この現象は、先に生まれたヒナが後から孵化したヒナを殺してしまう現象をいいます。たとえ生き残ったとしても、十分な餌を確保できないことから、脆弱な成鳥になるとされています。鷲使いは通常どちらか一方のメスを持ち帰るか、2羽とも取り上げてそれぞれ育て上げます。そのため、後から生まれた個体の生存率が増す可能性が指摘できます。

[HY₂] 食餌許容範囲の拡大：イヌワシはもともとかなり広い食餌許容範囲を持っています。そして鷲使いとの生活を通じて、普段は食べることの稀な家畜、とくに牛肉、馬肉、またキツネ、川魚

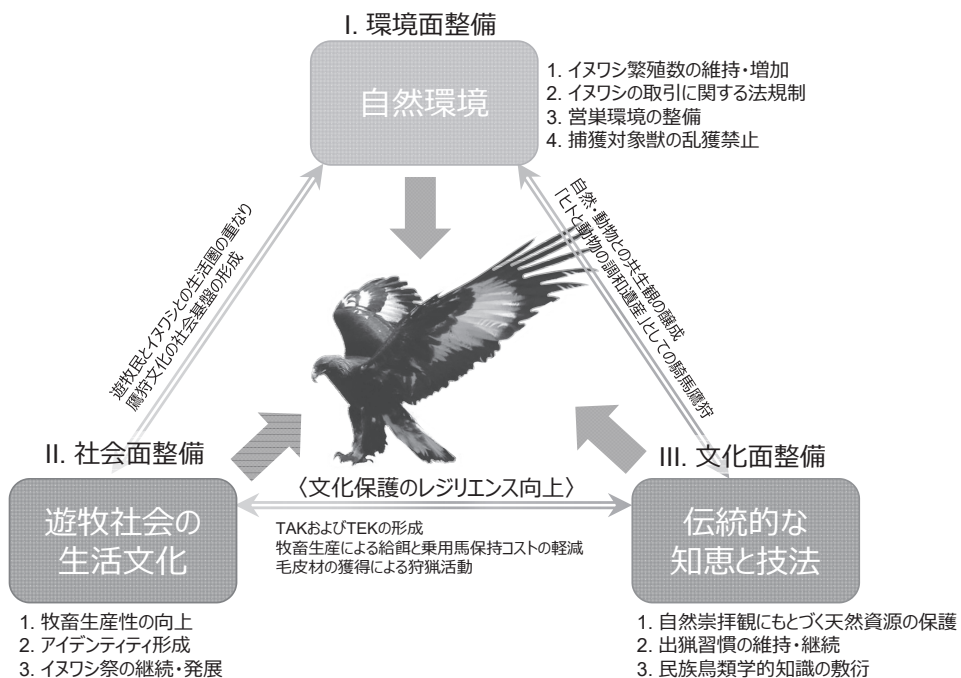


図9 騎馬鷹狩文化の文化保護のための成因関係図

などが与えられることで、食餌許容範囲をさらに広げる可能性があります。たとえば冬期に与えられる血抜き肉“アクジユム”など、本来は嗜好しない死肉や乾燥肉も許容できるようになります。そのため野生に返された後も、とくに採餌状況が不安定になった時期を生きながらえる能力が備わると考えられます。

[HY₃] 狩猟能力の開発：イーグルハンターとの出猟を通じて、野生では積極的に捕獲対象としないキツネやコサックギツネなど、多様な動物を狩猟対象におさめることができるようになります。さらにイヌワシの野生下での捕食行動の頻度以上に狩猟へ使役されることで、馴致個体の捕食・戦闘能力が開発される可能性があります。マスターとの狩猟による個体の狩猟能力の向上が、自然界での生存能力と繁殖に直結していると推測できます。

[HY₄] ヒトを恐れない性質：鷲使いとのラポール構築をへて、自然界に戻ったあとも人間の存在をそれほど恐れない性格になると考えられます。通常イヌワシは人間の存在に敏感に反応し、居住圏が制約される傾向があります。しかし対人馴致をへて、イヌワシの生息圏内での人間の生活活動にも過剰に攪乱されなくなり、居住範囲が制限されなくなる可能性があります。

[HY₅] イヌワシの営巣地点とヒトの生活圏の重なり：HY₁～HY₄のプロセスをへて「産地返還」されたイヌワシは、自然界で生きるイヌワシより人間活動地での適応に長け、かつ生存能力が総合的に強化された個体へと変貌している可能性があります [Soma 2015a; 相馬 2015]。人間に馴致したワシを野生に放つ「鷲使いの掟」があったからこそ、ヒトとイヌワシの生活圏がオーバーラップし、自然界でのイヌワシ繁殖数に貢献することで鷲使いとイヌワシの出会いが促進されてきたと考えられるのです。

数百年にわたりアルタイ山地の生活圏・営巣地をイヌワシとカザフ鷲使いが共有することで、イヌワシの人間に対する警戒心そのものが軽減された可能性もあります。イヌワシの個体数が維持されたため、ヒナや成鳥の捕獲が容易となり、ヒトへの馴化をへて再び山へと放されてきました。カザフ鷲使いとイヌワシの共栄する生存圏が創発され、かつ「産地返還の掟」が続けられたからこそ、

騎馬鷹狩文化は最大の生態環境の成因を失わなかったと推測できるのです。

VIII. まとめ：カザフ騎馬鷹狩文化の成立条件

騎馬鷹狩文化は通常の無形文化遺産と異なり、自然動物資源⇄牧畜社会⇄伝統文化との高度な調和によって成り立っています。単なるイヌワシ保持やイヌワシ祭りの開催だけが騎馬鷹狩文化を存続させるドライビング・フォースとはなりえません。いわば以下の条件（condition）C₁～C₃の3つが社会の総和として調和しなければならないと言えます（図9）。

[C₁] 生態環境面（イヌワシの営巣環境の保全）：騎馬鷹狩文化は馴致するためのイヌワシそのものがいなければ成立しません。そのためイヌワシの繁殖と営巣環境の整備は不可欠な条件となります。調査地モンゴル西部では、イヌワシの生物学的な調査研究（個体数、繁殖率、営巣地など）は前例がいまだにないのが現状です。同地域での継続的な調査研究とイヌワシ個体数の把握は必須となります。そしてイヌワシの行き過ぎた取引や捕獲を制限する法整備も求められています。

[C₂] 社会体制面（牧畜生産性の向上）：イヌワシ1羽に費やす年間の給餌食肉総量は、ヒツジ換算で9.6～12.0頭にもなります。そのため、鷲使い世帯各自が意識して牧畜生産性を高めることは、騎馬鷹狩文化を保全する必要条件と言えます。牧畜生産性を高めることは、生活を営む上での経済的・心理的負担の軽減にもなります。牧畜による狩猟馬の育成も出猟習慣を容易にする条件となるため必須といえるでしょう。

[C₃] 文化保護面（技術継承と出猟の継続）：現在のイヌワシ馴致と飼養術の根本を変容させている原因は、出猟習慣の減少・停滞と考えられます。本来イヌワシの馴化は、毛皮獲得のためのキツネ捕獲高を上げるために、日々のトレーニング、闘争心を呼び覚ますための冬季の食餌制限、パフォーマンス向上のための健康管理、の知識と技法を培ってきました。狩猟頻度の低下や出猟習慣の停滞は、狩猟での生産性と技術力の向上を意図した伝統知（TEK）と、鷹狩を成立させてきた多くの文脈の直接の消失に等しいと言えるのです。家畜の再生産でまかないきれない給餌食肉の確保のためにも、イーグルハンターたちは出猟を継続

させる必要があるのです。

現代のカザフ騎馬鷹狩文化に求められていることは、端的に言えば①伝統的なイヌワシ飼養術の伝承と②出猟習慣の継続なのです。イヌワシ祭りは文化面における保護意識を高め、実際にイヌワシ所有に向けたモチベーション向上に一役買ってきました。形式的な伝統保護のみならず、牧畜社会の生産体制面、さらに環境整備によるイヌワシ個体数の維持や獲物の管理など、総合的な文化保全インフラ（伝統知の継承、出猟の継続、古老の伝統知のドキュメンテーションなど）の内発的な整備と自己研鑽の継続が、カザフ騎馬鷹狩文化を今後も未来に継承する唯一の推進力になると言えます。

本稿は2015年12月19日開催の第35回雲南懇話会での講演内容にもとづいています。著者がこれまで個別に発表した論文（参考文献に明記）の内容を統合し、新出の知見を加えつつあらたな解釈・仮説を提示しました。

参考文献

- Canby, J.V.: Falconry (Hawking) in Hittite Lands. *Journal of Near Eastern Studies* 61: 161-202, 2002
- Epstein, H. J.: The Origin and Earliest History of Falconry. *Isis* 34 (6): 497-509, 1943.
- Georgiev, D.G.: Diet of the Golden Eagle (*Aquila chrysaetos*) (Aves: Accipitridae) in Sarnena Sredna Gora mountains (Bulgaria). *Ecologia Balkanica* 1: 95-98, 2009.
- Mason, J.R.: Golden Eagle Attacks and Kills Adult Male Coyote, *J Raptor Res.* 34(3): 244-245, 2000.
- Soma, Takuya.: Ethnoarchaeology of horse-riding falconry. *The Asian Conference on the Social Sciences* 2012: 167-182, 2012a. http://iafor.org/offprints/acss2012-offprints/ACSS2012_offprint_0271.pdf.
- Soma, Takuya.: Contemporary falconry in Altai-Kazakh in Western Mongolia. *The International Journal of Intangible Heritage* 7: 103-111, 2012b. <http://www.ijih.org/volumeMgr.ijih?cmd=volumeView&volNo=7&manuType=02>
- Soma, Takuya.: The art of horse-riding falconry by Altai-Kazakh falconers. *HERITAGE* 2012 (vol.2): 1499-1506, 2012c
- Soma, Takuya.: Ethnoarchaeology of ancient falconry in East Asia. *The Asian Conference on Cultural Studies* 2013: 81-95, 2013a. http://iafor.org/offprints/acss2013-offprints/ACCS_2013_Offprint_0108.pdf
- Soma, Takuya.: Ethnographic study of Altaic Kazakh falconers. *Falco* 41: 10-14, 2013b. <http://www.mefrg.org/images/falco/falco41.pdf>
- Soma, Takuya.: Eagle Hunters in Action: Hunting Practice of Altaic Kazakh Falconers in Western Mongolia. *Falco* 44: 16-20, 2014.
- Soma, Takuya., Buerkert A., Schlecht E.: Current Living Status and Social Use of Livestock in Nomadic Herders' Communities in Western Mongolia. *Tropentag* 2014: 231, 2014. http://www.tropentag.de/2014/abstracts/links/Schlecht_bbl4Jzjc.pdf.
- Soma, Takuya., Battulga S.: Altai Kazakh falconry as 'heritage tourism': The Golden Eagle Festivals of western Mongolia. *The International Journal of Intangible Heritage* 9: 135-148, 2014.
- Soma, Takuya.: Human and Raptor Interactions in the Context of a Nomadic Society: Anthropological and Ethno-Ornithological Studies of Altaic Kazakh Falconry and its Cultural Sustainability in Western Mongolia. University of Kassel Press, Germany, 2015a.
- Soma, Takuya.: Falconer's Equipment and Folk Ornamentations of Altaic Kazakh Eagle Masters in the Altai Region of Mongolia. *Falco* 45: 12-15, 2015b.
- エミール・ヴェルト（藪内芳彦、飯沼二郎 訳）：農業文化の起源。岩波書店、東京、1968: 120-122.
- 相馬拓也：形象なき文化遺産としての狩猟技術：キルギス共和国イシク・クル湖岸における鷹狩猟のエスノグラフィ。国士舘大学地理学報告 2007 (16): 99-106, 2008.
- 相馬拓也：アルタイ・カザフにおける鷹狩猟の民族考古学：無形文化遺産としての狩猟方法と技術継承の基礎研究。高梨学術奨励基金

- 年報 平成 23 年度研究成果概要報告：364-371, 2012a.
- 18) 相馬拓也：アルタイ＝カザフ鷹匠による騎馬鷹狩猟：イヌワシと鷹匠の夏季生活誌についての基礎調査. ヒトと動物の関係学会誌 32: 38-47, 2012b.
 - 19) 相馬拓也：アルタイ＝カザフ牧畜社会における騎馬鷹狩猟の民族考古学：無形文化遺産としての持続性に向けた複合研究. 高梨学術奨励基金年報 平成 24 年度研究成果概要報告：327-334, 2013a.
 - 20) 相馬拓也：アルタイ＝カザフ鷹匠たちの狩猟誌：モンゴル西部サグサイ村における騎馬鷹狩猟の実践と技法の現在. ヒトと動物の関係学会誌 35: 58-66, 2013b.
 - 21) 相馬拓也：イヌワシと鷲使いにみる「ヒトと動物の調和遺産」の可能性：モンゴル西部アルタイ系カザフ鷹狩文化の伝統知とその持続性の現場から. 日本地理学会発表要旨集(2014 年度日本地理学会 春季学術大会)：セッション ID: 505, 2014a.
 - 22) 相馬拓也：モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村における移動牧畜の現状と課題. E-Journal GEO 9(1): 102-189, 2014b.
 - 23) 相馬拓也：モンゴル西部アルタイ系カザフ騎馬鷹狩文化の存続をめぐる脆弱性とレジリエンス. E-Journal GEO 10(1): 99-114, 2015a.
 - 24) 相馬拓也：鷲使いの民族誌：モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化が育むイヌワシ馴化の伝統知. 文化人類学 80(3): 427-444, 2015b.
 - 25) 相馬拓也：カザフ騎馬鷹狩文化のイヌワシ捕獲術と産地返還にみる環境共生観の民族誌. E-Journal GEO 11(1): 119-134, 2016a.
 - 26) 相馬拓也：カザフ騎馬鷹狩文化の宿す鷹匠用語と語彙表現の民族鳥類学. 『鳥と人間をめぐる思考』, 勉誠社：345-367, 2016b.
 - 27) 相馬拓也：人類と猛獣の意外な関係：イヌワシ、ユキヒョウ、オオカミと共生するモンゴル遊牧民の底ヅカラ. 読売新聞 Waseda Online (2016年12月26日付) http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/international_161226.html. 2016c.
 - 28) 日本放送協会（NHK）：地球に好奇心：大草原にイヌワシが舞う～モンゴル・カザフ族鷹匠の親子～：NHK エンタープライズ（群像舎）制作（2003 年 12 月 13 日 10:05-10:57 放送）, NHK-BS2 Television, 2003.
 - 29) 日本放送協会（NHK）：アジアンスマイル：僕とイヌワシの冬物語～モンゴル・サグサイ村～：NHK エンタープライズ（株式会社グループ現代）制作（2010 年 1 月 16 日 18:30-18:50 放送）, NHK-BS1 Television, 2010.
 - 30) 日本放送協会（NHK）：地球イチバン：地球最古のイーグルハンター：NHK 文化福祉部制作（2015 年 1 月 29 日 22:00-22:50 放送）, NHK 総合, 2015.

Summary

Seeking the Origin of Horse-riding Falconry: Ethnography of Kazakh Eagle Hunters and Nomadic Animal Herders in Altai Mountains

Takuya Soma

Waseda Institute for Advanced Studies

Traditional horse-riding falconry has been still practice at a community of Altaic Kazakhs in Bayan-Ölgii Province in western Mongolia. However, eagle masters are now declining its population as well as traditional art and knowledge for taming and hunting due to massive cultural alteration by tourism. This research discusses vulnerability and resilience of preservation for Altaic Kazakh eagle falconry with reference to research result of ethnography and current social survey, cultural sustainability from long-term fieldwork. Eventually, cultural sustainability of Altaic Kazakh falconry needs to be supported from the angles of three theoretical frameworks; (1) Cultural affairs for protection based on the concept of nature-guardianship in its cultural domain, (2) Sustainable development and improvement of animal herding productivity and herder's livelihood, (3) Natural resource management, especially supporting the population of Golden Eagles, their potential prey animals, and their nesting environment. The series of these sustaining procedures defines that eagle falconry is a hybrid culture which would not preserved only human actions, but also maintenance of animal herding livelihood as crucial social context.